

Title	遠峰四郎先生を憶う
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.1 (2007. 1) ,p.124- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	遠峰四郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20070128-0124">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20070128-0124</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 遠峰四郎先生を憶う

遠峰四郎先生は、私が教えを受けた大先輩である。先生は暖かい心の持ち主であった。自らも年をとつてみると、私が先生の講義を聴いていた時の先生の心境の一端がわかってくるような気がする。

私が聴いた先生の講義は、「中近東論」と「イスラム法」であったと思う。先生は淡々と話をされる。凡庸な学生はそれを退屈と感じ、そこで終る。私はそうではなかった。

当時、そして今でもそうであるかもしれないが、法学部政治学科の教育内容は圧倒的に西洋の学問が中心であった。そのような雰囲気の中で、私は中国が西洋と違うと感じ、思いをめぐらしていた。遠峰先生はよくアラビア文字を黒板に書き、イスラム法の概念がいかに西洋の法と違うかを説かれるのを聞き、私には大いに共感するところがあった。

私が先生の講義を聴いていた時代は、学生運動華やかな頃であった。学生の政治行動の過激さと軽薄さに対し

て、先生は戦中に経験した困難に鑑み自らの強さを強調されていたことが、私の記憶に残っている。当時私はそのことを良く理解することができなかったが、戦中・戦後の先生の経歴を拝見して、今になってわかってきたような気がする。

先生に日頃接するなかで、「名利を求めず」という先生の態度が良く伝わってきた。人間である以上常にそうであったかどうかわからない。しかし、先生はいつも若い私に声をかけ、励まして下さった。三田を去られて松阪大学に行かれてからも、会うたびに「やあ、山田さん元気」と声をかけて下さったことが、今でも耳に残っている。そのような先生を慕って、多くの学生が先生のゼミに集ってきた。先生のゼミの卒業生の会を開いた時、先生が都合で出席できなかったために、私が遠峰ゼミの卒業生の会に「友情出演」したこともある。その時、卒業生を通して、先生の暖かいお心が伝わってきた。

いまだにイラク、イランをめぐり国際政治が緊張している。先生が生きておられたら、そのような情況についてどう語られたであろうか。お伺いしたいところである。

山田辰雄